

## ●春日部市民文化講座（第 20 回） 「高山右近の茶の湯と信仰」

◆日時：2016 年 5 月 11 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

## ■生涯の理想、高山右近との出会い

今日のテーマは私のライフワークの「高山右近の茶の湯と信仰」です。それでは 400 年前に戻りましょう。高山右近という人に何故ぼくが興味をもったかという、ぼくが牧師としてキリスト者として、生涯を通して理想として目指せるキリスト者像を考えました。そしていろいろな人と出会ったのですが、結果として高山右近との出会いが大きかったのです。高山右近という人はキリスト教徒で、キリストのために死ぬことを厭わなかった人なのです。高山右近という人は若くして死ぬような危機的なことを 3 回ぐらい経験しているのですが、彼は死を覚悟して臨んでいるのですよ。最後は家康から「お前なんか、日本列島から出て行け」って言われて、宣教師並みに扱われて宣教師と一緒にボロボロの船に乗せられて南国のマニラに行って 40 日位で死んでしまうのです。彼は自分が死ぬことは分かっているのですが、「ぼくが死ぬと言うと、周りにいる人たちが悲しむから言わないけれども、ぼくはここで死んでも神様の御心のままに生きてきたので構いません」とモレホン神父に話しているのです。ぼくは、これは本物だなあと思いましたね。彼は、あらゆる困難から逃げていないのですよ。でも、高山右近を調べようとしたら、まず最初に聞いたのが「茶の湯」です。ぼくには訳が分からないのです。最初に訳が分からなかったのが、「羽箒が良くできたので一服差し上げたい」という書状なのです。まず、「一服」や「羽箒」が分からないのですよ。だったらお茶をやらなくちゃだめだなあ…と思って始めたのです。信仰の方は、ぼくは神学校に行った牧師ですからある程度は分かりますよ。でも、「羽箒」や「一服」には参りましたね。

## ■利休七哲における高山右近

高山右近は利休七哲、七人衆の一人で、蒲生氏郷に次いで位置づけられています。蒲生氏郷は、千利休が切腹して千家が断絶しかけた時に、少庵を領地の会津に 5 年間匿い、秀吉の勘気が収まった時に徳川家康と京に呼び戻した千家を守った人なので少庵の子・宗旦が一番目に挙げたのです。二番弟子が高山右近になっているのですけれども、ぼくは順番が逆だと思います。三番目が細川越中、細川ガラシャの夫で三斎です。四番目が芝山監物、五番目が瀬田掃部、六番目が牧村兵部、そして七番目に古田織部を挙げています。これが七哲、こういう人たちによって「利休の茶」と呼ばれる侘び茶が完成していくのですね。高山右近というのは並みの人ではなかったのです。若くしてポルトガル語を学んで読み書きができたのです。ですから高山右近という人は、千利休の弟子の中でも非常に近くにいた人だろうと思います。

## ■高山右近と利休さんの出会いと親交

千利休と高山右近が何時、どこで出会ったかが、今でも学者先生たちでも分からないのですよ。ただ、状況証拠として荒木村重が千利休に茶の湯を習っていたので、そして当時の一流の文化人である荒木村重の下に高山右近がいましたので、紹介されたのであろうと思われま。さて、京都山崎の妙喜庵、利休さんが造ったと言われている国宝の『待庵』、二畳の茶室があるのです。その侘びた茶室を造った時に、利休さんは材木の目利きを右近に頼んでいるのです。この山崎と右近が城主であった高槻は本当に近くなのです。そして、丸太を送ってくれた右近に、利休さんの直筆が遺っています。「丸木六本、仰せ付けられ候内、一本、用に立ち申し候。大慶、此の事に候。相残るも、別に、用に立ち申すべく候」というのです。その内の一本は床柱に使われたのだと思いますが、二畳の茶室を造るに当たって材木の目利きをさせるほどに利休さんが右近を信頼していたという証拠品なのです。このことを古筆学者の小松茂美先生の論文の中で発見した時にも感動しました。こういう関係にあったのかと思いました。でも、こういう証拠品って物凄く少ないのですよ。このように茶の湯を通しては、利休さんと高山右近の関係は消すことができなかったのですが、それ以外ではもうほとんど消されています。特に金沢に流されてからの二十何年間の間、右近の屋敷跡も分らない。教会を 3 つ造ったのですけれども、それらもどこだか判らない。宣教師が居たはずなのですが、その宣教師が居たことも分からないのです。

## ■「捨ててこそ」と生きた高山右近

1614 年に高山右近は宣教師たちと一緒に長崎から国外追放される訳です。そのことが、ぼくにとっても魅力に感じられたことですね。人間が生きているというのは、捨てることのできない食欲と闘っていくことなのです。欲そのものは悪くないけれども、食欲になると悪くなるのですよ。だから食欲を持っている人の顔つきは悪くなるのです。でも、自分では本当の顔を見ることができないのですよね。鏡に映した顔は反対で虚像だからです。ぼくは聖書を読む物として、これは神様の知恵だなあと思っています。高山右近という人は、この食欲といつも闘っていた人なのです。戦国時代ですから、命も含めて取るか取られるかなんですよ。そういう中で、彼は利休さんの侘び茶を通して「捨ててこそ」の人生を歩んだのです。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みだす。一番、安易な生き方は

食欲に生きることです。右近は、利休さんの侘び茶の中枢に入って行く度にどんどん捨てていきました。秀吉から「お前は俺を取るのか、キリスト教を取るのか」と訊かれたら、「城は殿にお返しいたします」って大名を辞め明石城を返してしまったのです。千利休は、そうした右近の姿を読み込んでいたのです。それは、ポンポンポンポンと出てくるその当時の手紙を読むと、高山右近の信仰が分かっていた人だなと分かるんですよ。

#### ■高山右近の茶室は時々勤払拭の場だった

高山右近が小さな二畳「待庵」の茶室造りに貢献して、利休さんはさらに一畳半の茶室を造っているのですよ。一畳半と言ったら、皆さんはご臨終の時を考えてください。死んだあなたが横たわる 1 畳と弔う人 1 人が半畳に座っている空間なのです。その半畳に座ってくれる人がいなかったら、皆さんどうしますか。こんな寂しいことはないでしょう。せめてマザーテレサが座ってくれていれば、マザーテレサの心ってそうですよ。人間が最後の時、せめて人が死ぬときくらいは、せめて私たちが傍にいてあげられたらという心なのです。右近も本当にそういう心を持っていた人ですね。茶の湯とは何かといったら、捨てて捨てて、最後は自分の命まで捨てるのですよ。その時に寂しいか、充実しているか、本当に捨てたときにその向こうがちゃんと見えているかどうか、ここは心の目でしょね。ぼくが表千家に入門したときに、お家元の即中齋が講義されてパシッと「時々勤払拭(じじほつきに つとめよ)」と言われたのです。「皆さんはいつも清々しい気持ちで、お客様をおもてなしできるように努めていますよね」って、これは道具のことではないのですよ。茶人として皆さんは自分の心をどう掃除していますかということなのです。ここが高山右近の茶人としての修行の中心にあるわけです。心をどう洗い清めるか、侘び茶の神髄は自分の心の食欲とどう闘って清めることができるかなのです。「高山右近は、いつも小さな茶室に籠もって祈りをしていた」と右近の茶室での姿をロドリゲスの『日本教会史』に書かれているのです。ですから、高山右近にとっての茶室は、お客様をおもてなしするだけでなく、神様の前で自分自身の心を掃き清め「時々勤払拭」する場所だったのです。

#### ■高山右近の茶の湯はキリストの心

ぼくは、高山右近が禅宗の哲学と宗教によって、千利休から学んだ茶の湯を自分の茶の湯として構築するはずがないとハッと気が付いたのです。そして、高山右近の周辺を調べていくときに、利休さえも確かに堺のお寺で修行して宗易という法名をもらっているのですけれども、キリスト教徒だったのではないかと思うようになったのです。利休七哲の高山右近、蒲生氏郷もそうですし、細川忠興の奥さんのガラシャがそうでしょう、瀬田掃部、牧村兵部、芝山監物もみんなキリシタン大名なのです。そして七人衆の中で「無能」と評されている古田織部については、「古田織部は何者か？」と言われるように消されていて良く分からないのですが、ぼくはキリスト教徒だという見方をしています。それは、大きな仕掛けがあるのですけれども、秀吉の末期でキリスト教徒が弾圧されたときに、ロドリゲスという人がローマまで連れて行った少年たちを連れ帰って秀吉に会いに行こうとするのですが、2 か月以上も瀬戸内海に面した室(今は室津)という小さな港に留め置かれました。当時は、堺に入る船が行き来する条件の良い所で栄えたまちだったのです。ですから、当時のお女郎さんが 1 人で立派なお寺を寄贈することのできたような栄えたまちだったのです。そこで実はキリスト教の会議が行われたらと思ういます。そこには、高山右近やロドリゲス、オルガンティーノもいたでしょうし、そこに古田織部もいたのではないかと、ぼくは思うのです。そこで織部は「あなたは、日本のこれからの迫害下の中で歴史・文化の中で生きてキリストの証人になりなさい」と言われたのではないのでしょうか。だから、彼の造った茶道具の中で最も有名なのは「織部燈籠」です。普通は全部が禅宗で解釈される話を、事実を結んでキリストの心で繋いでみると、高山右近は禅宗の茶の湯ではなかった、キリストの心で捨ててこそその「侘び茶」をしていたのだと分かったのです。ですから、ぼくにとっての「侘び茶」は、英語で言うと「コンパッション」であり、聖書の言葉で言うと「憐れみ」という意味になるのです。ラテン語で「コン」は共に、「パッション」は苦しみでしょう、だから「共に苦しむ」ことが「侘びの心」なのです。戦国の世にあって、茶室で敵も味方も一緒にお菓子をいただき、一碗の廻し飲みでお茶をいただく、そして飲み口を懐紙でヒュッと拭くだけなのです。衛生的でもなんでもないので、これが私の茶、利休の茶の極意ですとやったのです。

#### ■一座建立

茶室の中に持って入れるのは扇子だけです。その扇子を正客は広がる方、末広がりの方を次客の方に向けて腰の後ろに置くのです。次客は扇子の広がる方を正客の方に向けるのです。これが「一座建立」といって、いやな相手とも一緒にお茶を飲んで、今日は楽しかったなあと言えるエールの交換なのです。ですから、己を信じていなかったら人を祝福するなんてできません、己を信じ愛することが大切なのです。露地は露呈の「露」で、イエス様の「自分を捨て苦しみを背負って、それを分かち合うことができなければ、苦しんでいる人と共に苦しみ、喜んでいる人と共に喜ぶ生活なんてとてもとても」っていう、イエス様の山上の説教がそのまま茶庭に出ているのですよ。

高橋先生のキリスト者としての研究が高山右近、茶の湯、千利休へと結ばれていったのですね。